

## NP<sub>1</sub>, V, Prep, NP<sub>2</sub> 構造と Passivization

滝 野 徳 三 郎

NP<sub>1</sub>, Aux, V, Prep, NP<sub>2</sub>, X, *by*^*passive* の構造に受動変形 (passivization) が適用されると, NP<sub>2</sub>, Aux+*be*+En, V, Prep, (*by*+NP<sub>1</sub>,) X という受動構造が導かれ<sup>1</sup>, 次例のようになる.

- (1) people laughed at his jokes
- (1)' his jokes were laughed at by people
- (2) the car ran over a cat
- (2)' a cat was run over by the car

然しながら, NP<sub>1</sub>, Aux, Vt, NP<sub>2</sub>, X という Vt を formative とする構造が, 受動変形によって必ずしも対応する容認可能な受動態 (passive) を生成するとは限らないと同様に, あるいはそれ以上に複雑な constraints を, この Prep を含む構造は, 有っているように思われる. 例えば,

- (3) he slept in the bed

という能動態 (active) から派生された受動態,

- (3)' the bed was slept in

は容認可能であるが,

- (4) he slept near the bed

は, 受動変形が適用されると,

- (4)' \*the bed was slept near

のように非文となる. どちらも location を表わす in the bed と near the bed の prepositional phrase が, 能動態では同じ統語機能 (syntactic function) を示しながら, 一方は容認可能な, そして他方は容認不可能な

受動態を生成するのは何故か。V, Prep, NP<sub>2</sub> という string は, Prep と NP<sub>2</sub> との間の結合 (cohesion) も然ることながら, V と Prep との間にも微妙な関係があると考えられるわけで, これらがこの string を含む能動態に対する受動変形にどのような関わりを有つのか, さらには他の何等かの要因が見い出されるべきなのか, 小論は主としてこれらの問題に焦点を当て考察を試みるものである。

## 1

B. Fraser は表層的に類似した次の三つの strings,

(5) he looked up the information

(6) he threw up the ball

(7) he sped up the pole

における looked up, threw up, sped up のそれぞれの V と up の結合上の相違を syntactic な観点から分類し, (5)を verb-particle combination, (6)を verb-adverb sequence, (7)を verb-preposition sequence とした<sup>2</sup>。これは意味解釈に言及せずいわゆる transformation tests による構造間の contrasts をもとにその patterning をはかったものであるが<sup>3</sup>, これら(5), (6), (7)の各々に受動変形を適用すると次の様になる。

(5)' the information was looked up

(6)' the ball was thrown up

(7)' \*the pole was sped up

(5)', (6)'はどちらも容認可能な受動態と言えるが, (7)'は非文となる。(7)'が非文となる理由は, 単純に考えるならば, Fraser が能動態(7)の up を preposition の範疇に入れているように, 後続 NP<sub>2</sub> の the pole との結合が強く, 容易に分離が許されないからと言うことが出来る。この事実, 各々の up+NP<sub>2</sub> を sentence-initial position へ移動させれば, 受動変形の結果とは反対の現象が現われることによっても証明される。

(5)'' \*up the information he looked

(6)'' \*up the ball he threw

(7)'' up the pole he sped

即ち、adverbial な up を formative とする (5)'', (6)'' が非文となる  
 に対し、prepositional な up をもつ (7)'' は容認可能となる。

表層上類似した (5), (6), (7) の構造に対する Fraser の patterning  
 はそれなりに評価すべきものであるとして、これらの構造に課せられる受  
 動変形のうち、(7) のような Prep を formative とする構造の pattern  
 は常に非文を派生する、と言った簡単な結論で終るものでは決していない。  
 それは Prep と後続 NP とが統語的結合を保ちながら、先行の V との  
 間にも重要な意味的結合を示す場合があるということである。F. R. Palmer<sup>4</sup>  
 や R. Quirk & S. Greenbaum<sup>5</sup> は、この種の結合がしばしば一つの  
 semantic unit を形成し、機能的にも Vt と equivalent であるという判  
 断から、Prepositional Verb (以下、Prep-V) と呼称し、そのような意  
 味的結合を示さない Verb+Preposition (以下、V+Prep) と区別して  
 いる<sup>6</sup>。(1)の laugh at, (2)の run over および次例、

(8) someone will look after John's father

(9) they asked for more water

の look after, ask for などが挙げられよう。そして、統語的にも single  
 transitive verb と見做すことの出来る結合であるからこそ、受動変形の  
 可能性を有つようになったと言える<sup>7</sup>。(8), (9)の受動態、

(8)' John's father will be looked after

(9)' more water was asked for

は、共に容認可能となる。

では、一つの semantic unit を形成し、さらに Vt で replace 出来る  
 ような条件があれば、受動化は常に可能であろうか。確かに、laugh at=  
 deride, look after=tend, ask for=request などの場合は、その条件を

備えている。しかし、

(10) John went up a wall

(11) the house looks to the south

は、went up=climbed, looks to=faces と replace 出来ても、

(10)' \*a wall was gone up by John

(11)' \*the south is looked to by the house

のように、その受動態は accept 出来ない V+Prep 構造であるし、また、Prep-V を含むと見做される次例<sup>8</sup>、

(12) I didn't take to him

(13) she went for him in a big way

は、受動変形が適用されても非文となってしまう。

(12)' \*he wasn't taken to

(13)' \*he was gone for in a big way

Prep-V の transitivity が容認可能な受動態を生成する要因になっていることは事実であり、そのために受動変形による testing が Prep-V と V+Prep の構造の判別に使用されることも理由なしとしない。然しながら、結局は Palmer 自身も、この判別の方法を評価しながらも、その依って来たる V と Prep の結合の本質を解明することの困難さを認めている<sup>9</sup>。D. Bolinger の次例<sup>10</sup>、

(14) he went into the subject carefully

(14)' the subject was gone into carefully

(15) he came into a fortune

(15)' \*a fortune was come into

においても、(14)の went into と(15)の came into の結合のどこにその受動態の acceptability の相違の要因を見出し得るだろうか。E.Couper-Kuhlen も、この「結合」という概念は、決して独立した信頼し得る基準がないだけにかなり曖昧なものであると述べている<sup>11</sup>。では与えられた

NP<sub>1</sub>, Aux, V, Prep, NP<sub>2</sub>, X の構造をもつ能動態は, V と Prep の結合以外に, 他のどの様な要因がどの様な場合に働き, 容認可能な受動態の生成に結び付くのであろうか.

## 2

能動態における V と Prep の結合の度合から, 受動化の可能性を判断することの困難さは上述の通りであるが, 生成されて容認可能となった受動態の V と Prep の結合の状態を観ておく必要がある. 即ち, V と Prep の結合が, 結果的にどの様な状態で受動態として容認されるようになっていくかということである.

通常, 受動態は, 1) 行為の主体 (agent) が不明な場合, 2) 行為の主体が context から判然としている場合, 3) 行為の主体よりも 行為を受ける passive subject に関心がもたれる場合などにおいて使用されるわけだから<sup>12</sup>, しばしば by に後続する行為の主体が by とともに削除されていることが多い. このことは, 当然, Vt の他へ働きかける [actional] な性質とともに, 受動態では [statal] な特徴をも表わす場合が少なからずあるということである. Quirk も行為受動態 (actional passive) と状態受動態 (statal passive) という用語で区別しているが<sup>13</sup>, この区別を明確にするために, 他の要素が付加されることがある. 例えば,

(16) someone sells the house

の受動態は,

(16)' the house is sold

となるが, これだけでは [actional] か [statal] かは判然としない. 明らかに家がすでに売却済みであることを示すためには, 完了の意味を表わす adverb の already が付加されて,

(17) the house is already sold

とならなければならない. 因に, (17)の能動態,

(17)' \*someone already sells the house

は非文であるから、正しく対応するものとしては、完了時制を伴った、

(17)'' someone has already sold the house

ということになる。また、次例<sup>14</sup>、

(18) at that time they were not yet married, but they were married yesterday

でも、前の受動態が [statal]、後のそれが [actional] であることは、その付加的要素によると言える。このように、受動変形が一つの能動態に対応する受動態を派生すると言っても、[actional] か [statal] かによって Aux や X、たとえば、adverbial や tense や modal など、様々な要素の付加が constraints になるということが分る。

NP<sub>1</sub>, V, Prep, NP<sub>2</sub> 構造の場合も、なんらかの形で、この一般的な constraints を免れ得ない。しかも、V と Prep という二つの formatives から構成されているだけに、単独の Vt の場合よりもよりきびしい条件が要求されるのは当然である。すでに冒頭で例示した、

(3)' the bed was slept in

(4)' \*the bed was slept near

において、(3)'は容認可能であるが、それは passive subject の the bed の本来的な性質を表わす表現として、二つの formatives, slept と in が意味的に結合した形になっていることである。一方、(4)'の slept near が容認されないのは、それが the bed とは意味的に互いに排除し合うからと見るべきであろう。このことは、V と Prep の結合の仕方が、能動態の場合と受動態の場合とでは、意味的にも機能的にも異なるということ、そしてそれだけに単一の Vt の場合より constraints が多いということである。(3)'では [actional] か [statal] かは少し判然としないが、(18)のように他の要素が付加されて、

(19) at that time the bed was not yet slept in

のようになると, statal passive であることが明確になる。この様になると, 受動化された構造の中での in は, V との意味的結合が非常に強くなっていることが認められるだろう。

... it should be remarked again that it is the passive voice itself which is largely instrumental in linking preposition and verb together, the union being less sensibly felt in the active voice<sup>15</sup>.

The development of the passive construction of verbs governing a prepositional object may also have been furthered by the similarity in form of these combinations to those with adverbs that are uniform with prepositions ...<sup>16</sup>

そしてまた, Prep が形態的に adverb と類似していることが, 受動構文の発展を促したとする Poutsma の解釈からすれば, 受動化によって V の後に後置されている Prep という見方よりも, むしろ機能的には adverbial な性質を有つようになったと考える方が妥当である。

### 3

受動化された構造の中の V および V と Prep の結合の性質や機能, さらに付加的要素の必要性などについては上述の通りであるが, 能動態のレベルで, NP<sub>1</sub>, V, Prep, NP<sub>2</sub> 構造に受動性があるか否かの手掛りが見い出せたわけではない。V と Prep の結合の度合が, 既述の如く, 確かな判断の基準に成り得ないとすれば, 他にどのような要因がその手掛りとなるであろうか。

V と Prep の意味的結合は, 統語的には受動化を可能にする transitivity または pseudo-transitivity<sup>17</sup> と関係するわけだが, 結合の一つの formative である V 自体の意味的特徴を見落すわけにはいかない。Poutsma

は受動変形を許容しない種類の V として、例えば、abound in, abut on, accord with, admit of, belong to, etc. を挙げ、その理由として、

They are none of them suggestive of a person or thing that is subjected to an activity, which alone would render passive conversion possible. This is borne out by a comparison of such a verb as *to belong (to)* with *to preach (to)*, *to write (to)* and other similar verbs construed with *to*, which freely admit of passive conversion.

と述べている<sup>18</sup>。

- (20) the emergency admits of no delay
- (20)' \*no delay is admitted of by the emergency
- (21) the book belongs to him
- (21)' \*he is belonged to by the book

これらの V は、Prep との結合による transibility とは関係なく、行為を受ける人や物を示唆しないという V それ自体が所有する意味素性 (semantic feature) によって、受動変形の適用が許されないのであるから、いわば中間動詞 (middle verb)<sup>19</sup> のように取扱うべきであろう。

次に他の formative である NP<sub>2</sub> は、受動変形において V と Prep 結合にどのような関わりを示すであろうか。まず、Quirk の例を引用しよう<sup>20</sup>。

- (22) the engineers went into the problem
- (22)' the problem was gone into by the engineers
- (23) the engineers went into the tunnel
- (23)' \*the tunnel was gone into by the engineer
- (24) they arrived at the expected result
- (24)' the expected result was arrived at
- (25) they arrived at the splendid stadium



(25)' \*the splendid stadium was arrived at

注意すべきは, (22), (23)の went into と(24), (25)の arrived at の V と Prep の結合が,それぞれ(22)'と(23)'および(24)'と(25)'の受動態において,同じ反応を示していないということである。この理由は,明らかに Prep 後続の NP<sub>2</sub> の意味素性が異なるからと見なければならない。即ち, NP<sub>2</sub> が [abstract] であるか [concrete] であるかによって acceptability に相違が現われている。[abstract] な NP<sub>2</sub> が後続するとき, go into, arrive at, look into, etc. の Prep-V は必然的に [figurative] な意味に用いられるようになり, この場合に限り受動化が容認されるということとは<sup>21</sup>, NP<sub>2</sub> が受動変形に一つの constraint を与えていると言うことである。

次に active subject の NP<sub>1</sub> について述べるならば, これも後続の V と Prep の結合および NP<sub>2</sub> と様々な関わりがあるから, 言うなれば contextual な観点から検討する必要がある。例えば,

(26) people ran down the hill

は, V+Prep 構造であるけれども, 受動変形が適用されると,

(26)' the hill was run down by people

のように容認可能となるが,

(27) a shiver ran down her spine

の受動態,

(27)' \*her spine was run down by a shiver

は非文となる。これら二つの NP<sub>1</sub> を比較すると, (26)の people は active subject の概念のうちの一つである [agentive], 即ち, V の表わす行為を直接引き起こす [animate] であるという点で, [non-agentive] の (27)の shiver とは異なり, 受動化の条件があると言うことが出来る。

(28) John was beating against the door

(28)' the door was being beaten against

においても, [agentive] の John が [volitive] な行為として beating しているから, 受動化が可能であることは比較的容易に判断出来る. 然し, active subject が [agentive] であれば, 常にその受動態が容認されるとは限らない. 例えば,

(29) Mary was striking at the table

(29)' the table was being struck at

は, (28)と同様, [animate] subject の意志的行為が表われているから, (29)'は可能となるが, striking を sewing に lexical change すると,

(30) Mary was sewing at the table

(30)' \*the table was being sewn at

のように, (30)'は非文となってしまう. (29)'と(30)'の acceptability の相違をもたらした理由を, 結果から判断すれば, (29)の striking at の方は結合の度合が強く, (30)の sewing at の方はその度合が無いか, 若しくは弱いからであると言うことが出来る. 然し, その結合の度合を能動態のレベルでとらえようとすれば, この場合, NP<sub>1</sub> と V の at the table に対する行為の関わり方に注意を向けてみる必要がある. 統語的には, どちらの at the table も location を表わす prepositional phrase であるが, (30)の方は, どちらかと言えば sewing が行なわれている場所を指示しているだけで, Chomsky の表現を借用すれば, 「様々な型の Verb Phrase と全く自由に生じ得る」<sup>22</sup> adverbial であり, これを削除することも可能である. これに対し, (29)の方は, subject の striking という行為が at the table に向けられ, そこに [effective] な力が期待されていると考えられるから, 従って, at the table の striking に対する関係は, 「Verbs に対しはるかに closer な構造をなして」<sup>23</sup> いると言わなければならない. (30)の at が prepositional であるとするれば, (29)の at は, その後続する NP<sub>2</sub> の故に V との結合を余儀なくさせられ, adverbial な性質をも併せもっていると言えるであろう. [effective] という意

味素性を認めることによって, strike at が一つの semantic unit を形成していると考えることが出来るならば, これも受動化への一つの条件ということが出来る.

ところで, NP<sub>1</sub> が [agentive] でないにも拘わらず, 非文とならない場合がある.

(31) strong winds beat against the door

(31)' the door was beaten against by the strong winds

確かに, strong winds は, 主体的意志的ではないが, しかし, 自然には人間の意志とは関わりなく一つの force があり, この force が beat という行為となって現われていると考えることは出来ないだろうか. 従って,

(32) the wind blew round the yard

(32)' \*the yard was blown round by the wind

のように, the wind が the yard に対して強い force を与えない context では, 受動態は非文になってしまう.

また, [effective] な要素を示す beat against が使用されても,

(33) the hammer beat against the door

(33)' \*the door was beaten against by the hammer

のように, NP<sub>1</sub> が [agentive] でなく [instrumental] な場合も, 受動化は困難と見るべきであろう.

すでに, (3)と(3)'に言及した際, slept in は passive subject の the bed の本来的な性質を表わすが故に容認されるべき statal passive であると述べたが, この説明は次例では適合しない.

(34) John sat on my coat

(34)' my coat was sat on

何故ならば, my coat は本来的な目的からして, sat on されるべきものではないにも拘わらず, (34)' は非文とならないからである. この場合は, John が my coat に [effective] な力を与えた行為と見做すことは

出来ないであろうか。[agentive] と [effective] が、受動化の条件の一つになることは、前述の通りである。

## 4

さて、以上において、NP<sub>1</sub>, V, Prep, NP<sub>2</sub> 構造に対する受動変形の可能性についてその考察を試みたが、そこにはかなり複雑な constraints があることを認めなければならない。伝統文法家たち<sup>24</sup>が、しばしば V と Prep の密接な結合 [(high cohesion) を条件としたことは、それなりに理由のあることではあるが、それが容認可能となった受動態からの判断であるとすれば、それは一種の circular logic であることを免れ得ない。結合が一つの条件であることは認めざるを得ないとしても、問題は単に V と Prep という二つの formatives 間の結合だけではないということである。重要なのは、個々の formative が内在させている意味素性と、そしてこれらの素性が NP<sub>1</sub> と V(+Prep), V(+Prep) と NP<sub>2</sub>, さらに NP<sub>1</sub> と V(+Prep) と NP<sub>2</sub> という各 string の中で、どのような関わり合いを有つかということである。もちろん、ここで触れた [actional], [stat-al], [agentive], [animate], [instrumental], [abstract], [concrete], [figurative], [volitive], [effective] etc. の素性は、その僅かな一部に過ぎず、これらを組み合わせただけで、受動化の可能性についてそのすべてを判断することなどは到底出来ない。拙稿は、ただこの様な意味素性の相互作用がなんらかの形で受動化への要因になっていること、そして Aux, X の要素を含めて構造全体を contextual な観点からみることの必要性について、その一端を瞥見したに過ぎない。恐らく想像される複雑多岐な素性の展開を解明する作業は、困難そのものであろう。それだけに今後の課題として一層緻密な分析が要求される。

## 注

- 1 N. Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax* (1965) では、受動化が manner adverbials をとる V に限られるところから、概略、1) Manner → *by* passive 2) NP, Aux, V, NP, *by* passive のように定式化し、2) の V の中に Vi も含ませているが、本稿では、専ら Prep を中心とした構造を取上げるので、V と NP との間に Prep を挿入した。なお、生成文法では、Vi+Prep を含む構造の受動化された形式を pseudo-passive と呼称している。
- 2 Cf. Brace Fraser, *The Verb-Particle Combination in English* (Tokyo: Tai-shukan Publishing Company, 1974), p. 1.
- 3 V と Particle (Prep も含む) と NP が結合する構造の中で、Particle がどのような syntactic patterns を示すかについては、拙稿「V+Prt+NP 構造における Prt の Syntactic Patterning」、『同志社大学英語英文学研究』、第11号 (同志社大学人文学会, 1975) を参照されたい。
- 4 Cf. F. R. Palmer, *A Linguistic Study of the English Verb* (London: Longmans, Green and Co Ltd, 1965), pp. 180 and 188-189.
- 5 Cf. Randolph Quirk & Sidney Greenbaum, *A University Grammar of English* (London: Longman Group Ltd, 1973), p. 350.
- 6 N. Chomsky, *op. cit.*, p. 101. で、Chomsky も V の下位範疇化の問題として、V と Prepositional Phrase との間の様々な度合の「結合」を区別することの必要性について言及している。
- 7 W. Van Der Gaaf, *The Passive of a Verb accompanied by a Preposition*, *English Studies*, Vol. XII, No. 1, (1930) 小川三郎訳「前置詞付き動詞の受動形」(研究社, 1958) において、Van Der Gaaf は、例えば barked at や spoke to を Vt に相当する統語法上の一単位とみなし、「受動形式をとる場合は動詞と前置詞との結び付きは一層緊密になるようである」と述べている。また、J. Angus, *Handbook of the English Tongue* から次の一節を引用し、V と Prep の結合の強さを説いている。『これらが受動形なり能動形なりに用いられ…両方の場合とも、前置詞が動詞の一部であるからである。』なお、Prep を V の一部とする見方は、例えば、look at がドイツ語の ansehen, オランダ語の aanzien に相当するところから来ている。
- 8 F. R. Palmer, *op. cit.*, p. 188.
- 9 *Ibid.*, p. 188.
- 10 Dwight Bolinger, *The Phrasal Verb in English* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1971), p. 7.
- 11 E. Couper-Kuhlen, *The Prepositional Passive in English* (Tübingen: Max

Niemeyer Verlag, 1979), pp. xi-xii.

... 'cohesion' — a rather hazy concept when applied to grammar, as there are no independent, reliable criteria for determining its presence or absence.

12 Cf. Otto Jespersen, *The Philosophy of Grammar* (London: George Allen & Unwin Ltd, 1948), pp. 167-168.

13 Cf. R. Quirk & S. Greenbaum, *op. cit.*, p. 359.

14 O. Jespersen, *op. cit.*, p. 274.

15 H. Poutsma, *A Grammar of Late Modern English*, Part II, Section II (Groningen: P. Noordhoff, 1926), p. 116.

16 *Ibid.*, p. 116.

17 この用語は確立されたものではない。V+Prep の構造は、Prep-V ほどの transitivity が有るわけではないが、context によっては受動化される可能性もあるので、この様な呼称を使用した。

18 H. Poutsma, *op. cit.*, p. 124.

19 middle verbs は、manner adverbials を自由にとることのない V であるから、受動化が許されない。以下、Chomsky (1965) の例から幾つか引用しておく。

\*John is resembled by Bill

\*a good book is had by John

\*I am fitted by the suit

\*two tons is weighed by this car

20 R. Quirk *et al.*, *A Grammar of Contemporary English* (London: Longman Group Ltd, 1972), p. 804.

21 *Ibid.*, p. 108. Quirk *et al.* は、[concrete] の場合でも、時として parallel な構造では受動化が行われるとして、次の例を挙げている。

This private correspondence of mine has been gone into and rummaged so many times that it is totally disarranged.

22 N. Chomsky, *op. cit.*, p. 101.

23 *Ibid.*, p. 101.

24 A. G. Kennedy, *The Modern English Verb-Adverb Combination* (1920); O. Jespersen, *A Modern English Grammar on Historical Principles* 3 (1928); W. Van Der Gaaf, *op. cit.*; H. Poutsma, *op. cit.*; R. Quirk *et al.*, *op. cit.* などがその名に挙げられよう。